

令和2年度 自己評価書

愛南町立平城小学校

【評価基準】 A:目標を達成 B:8割以上達成 C:6割以上達成 D:6割未満

項目	重点目標	評価指標及び目標値(期待される姿)	評価	考察(◇)及び改善方策(◆)	評価資料	年度末				
						アンケート結果				
						4	3	2	1	肯定割合
1 正しい子	あいさつができる子を育てる。	指標① すすんで元気なあいさつをしているか。 目標値 保護者・地域住民・教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 B	◇地域住民と、教職員の肯定率は80%を超えて高いが、保護者の肯定率が71%と低い。前年とほぼ同じ肯定率であり、全体的に大きな変化は見られない。学校や地域では挨拶ができていない児童が、家庭では元気な挨拶ができていないことが考えられる。家族間での挨拶が定着していない要因として、朝など親から子どもに挨拶の声を掛けていようかを探る必要がある。 ◆児童会のスマイルあいさつデーなどの児童を中心とした活動に力を入れ、継続的に挨拶を励行する。学校だより等で、家庭内での挨拶を呼び掛ける。	保護者アンケート①	17%	54%	28%	1%	71%
					地域住民アンケート①	19%	81%	0%	0%	100%
					教職員アンケート①	13%	67%	20%	0%	80%
1 正しい子	返事ができる子を育てる。	指標② 呼ばれたら「はい。」と気持ちよく返事をしているか。 目標値 教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 B	◇地域住民の肯定の割合は80%を超えているが、前年に比べると若干下がっている。教職員の肯定率は73%と、決して高くない。返事をする児童としない児童の二極化が進んでいるのではないかと考えられる。 ◆新型コロナウイルス感染症のため、集会活動や集団下校などの全体が集まる場が減っている。清掃活動や授業中などの学校生活全体において、全教職員が共通理解し、指導を徹底させたり、良い返事の児童を紹介したりして、児童の意識の高揚を図る必要がある。	地域住民アンケート②	20%	60%	20%	0%	80%
					教職員アンケート②	17%	57%	27%	0%	73%
					地域住民アンケート②					
1 正しい子	後始末ができる子を育てる。	指標③ 後始末がきちんとできているか。 目標値 教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 B	◇前年度より肯定率は上がっているが、80%には達していない。特に昼休みに使った道具の片付けや、トイレのスリッパや靴の整理などが徹底できていないことが目に付いた。 ◆教職員が、意識統一して後始末を見届け、学年、学級の差をなくして指導していくことが必要である。できるまで根気強く声を掛けていく。	教職員アンケート③	13%	60%	23%	3%	73%
					教職員アンケート③					
2 考える子	確かな学力の定着と向上に努める。	指標④ 授業が分かっているか。 目標値 児童の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 A	◇児童の自己評価は肯定率が84%で、目標を達成できていると判断できる。しかし、単元テストの平均正答率は、80%以上の児童の割合が目標を満たしていない学級や教科があり、その学年・教科で身に付けるべき学力を十分定着させているとは言えない。 ◆研修主任と学力向上主任が連携を取り、教育技術の向上を目指した授業改善の具体例について理解を深める機会を設けるとともに、支援員を含めた全教職員が指導改善に努める。	児童アンケート①	43%	41%	12%	4%	84%
					児童アンケート①					
2 考える子	確かな学力の定着と向上に努める。	指標⑤ 主体的に学んでいるか。 目標値 教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 A	◇教職員の肯定率は90%で、目標を達成していると判断できる。4と評価した割合も前年比で14%増となっており、主体性を伸ばす学習指導が行われていると考えられる。 ◆児童が主体的な学びを成果として自覚できる学びの場をつくる。題材の提示方法や学習の見通しを持たせるなどの具体的な工夫を共有し、実践して、振り返りを行っていく必要がある。	教職員アンケート④	20%	70%	10%	0%	90%
					教職員アンケート④					
2 考える子	確かな学力の定着と向上に努める。	指標⑥ 家庭学習を毎日15分×(学年)以上しているか。 目標値 児童・保護者の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末 B	◇児童の肯定率が75%、保護者の肯定率は71%であるため、目標に届いていないと判断できる。しかし、前年と比較すると上昇傾向にあることから、家庭学習に対する児童の意欲や、家庭での学習習慣に対する指導の徹底が図られてきていると考えられる。しかし、学年・学級間での取組に差があることが考えられる。 ◆3学期中に、研修会や運営委員会等で家庭学習に関する話合いの場を設け、今後の改善につなげる。また、ショートスパンで学習成果との関連性を分析し、学級経営に生かすよう努める。	児童アンケート②	52%	22%	18%	7%	75%
					保護者アンケート②	23%	48%	27%	2%	71%
					児童アンケート②					
					保護者アンケート②					

2 考える子	確かな学力の定着と向上に努める	指標⑦ 家庭読書を毎日10分以上しているか。 目標値 保護者の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	D	◇保護者の肯定率は25%で、目標値を大幅に下回っているため、D評価が適当である。前年の値とほぼ変わりがなく、今年度の取組に大きな効果が表れていないことを示している。全校的な読書活動の推進や、家庭との連携、学習との関連を意識した読書指導等について課題があると考えられる。 ◆図書館主任が児童の読書意欲を高める具体的な方策を提案する。学級担任はそれに基づいて、個別の読書指導を行ったり、各教科の学習と連携した学校図書を活用を児童に促したりする。また、町図書館支援員と連携して、家庭での読書活動を効果的・継続的に行う方法について提案する。 ◆保護者に、読み聞かせボランティアへの参加を呼び掛ける。	保護者アンケート④	8%	17%	52%	23%	25%
3 強い子	健やかな体を育てることに努める	指標⑧ 「早寝・早起き・朝ごはん」ができているか。 目標値 児童・保護者の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	B	◇児童の肯定率は92%だが保護者の肯定率が80%に満たなかったためB評価となる。児童と保護者の結果に20%近くのズレがあり、児童の自己評価の甘さがうかがわれる。早寝・早起きについては、テレビ・ゲーム時間との関連が大きいと考えられる。遅刻や朝食の欠食は、限られた児童で、習慣化できにくい児童は、家庭の教育力に課題があると考えられる。 ◆個別指導や学級活動を利用して睡眠の大切さを指導していく必要がある。朝食についても早起きとの関係があるため、睡眠と合わせて朝食の大切さについて個別指導や全体指導を継続していく必要がある。	児童アンケート④	66%	26%	7%	1%	92%
		指標⑨ 外で元気に遊んでいるか。 目標値 児童の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	A	◇肯定率は8割を超え、児童は外で元気に遊んでいると考えられる。これは、屋休みに学級担任が運動場で児童とともに遊んでいることが大きな要因の一つである。また、運動が好きと回答している児童も88%と高く、体を動かすことに対して前向きな児童が多い。これは学級担任や体育指導者の声掛けが効果的であったと考えられる。 ◆今後、寒さが厳しくなることから、外遊びを楽しむ児童は減少してくることが予想される。12月7日からの1週間の屋休みににおける児童の外遊び率は、6割程度であった。児童の体調を考慮しつつ、引き続き外遊びを推奨していく。	児童アンケート⑤	71%	17%	10%	3%	88%
4 生徒指導	生徒指導の徹底と健全育成に努める	指標⑩ 楽しく学校生活を送っているか。 目標値 児童・保護者の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	A	◇児童、保護者ともに肯定率は90%を超え、ほとんどの児童は楽しく学校生活を送っている。しかし、「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答した10%の児童をしっかりと見守り、声掛けしていくことが大切になると考える。 ◆アンケートや教育相談、見つめる会の情報を共有し、教職員間の連携を密にすることで、複数の目で、児童を見守っていく。また、家庭との連携も密にし、少しの変化でも情報共有して、見取りや指導に生かす。	児童アンケート⑥	68%	22%	7%	3%	90%
5 特別支援・人権教育	特別支援・人権教育の充実に努める	指標⑪ 自己効力感が育っているか。 目標値 教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	A	◇教職員の肯定率が、前年より12ポイント上昇し、100%になった。昨年度までの「人権教育研究指定校」として実践してきたことが継続されていることや、日々の授業改善が、児童の自己効力感を育てていると考えられる。 ◆異学年間での直接的な交流は難しい状況であるが、間接的な交流を工夫して行っていく。教職員や友達から言語的な励ましを受けたり、認められたりする活動を多く取り入れながら、児童に達成経験をさせていくことで自己効力感を育てていく。	教職員アンケート⑤	13%	87%	0%	0%	100%
6 教職員	教職員の人間力・指導力・組織力の向上に努める	指標⑫ 研修の自己研鑽に努めているか。 目標値 教職員の80%以上が肯定割合(4+3)	年度末	A	◇教職員の肯定率は83%であり、目標を達成していると判断できる。しかし、前年度と比較すると、その値は10%下がっており、これは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、校外研修会が大幅に減少したことが大きく関係していると考えられる。さらに、校内研修の内容等も十分とは言えず、自己研鑽の場が確保されていないことが要因だと考えられる。 ◆このような時期だからこそ、教職員がそれぞれ自己の課題と向き合い、進んで教育技術や指導法の改善に努めることが第一であるとする。また、GIGAスクール構想の動向を注視しながら、組織的なスキルアップを図る場を持つことも必要である。	教職員アンケート⑥	30%	53%	17%	0%	83%
学校関係者(学校運営協議会)の所見				対応	◆						